

平成28年度 徳島県立池田高等学校(全日制) 学校評価 総括評価表

No. 1

本年度の重点目標	課題	活動計画	評価指標	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	評価	評価	総合評価	学校関係者の意見	次年度への課題と今後の改善策
1 学ぶ意欲と自主的に学習する習慣を育て「確かな学力」を身につけた社会で自立できる人間を育成する。	① 家庭学習時間の確保と学習の習慣化	1 家庭学習時間調査週間を設け、一週間を通じた生徒の学習時間を把握し、家庭学習時間が確保できるよう指導に努める。	全生徒の平均家庭学習時間 2時間以上	全生徒の平均家庭学習時間は2.2時間(前年度2.2時間)であった。1・2年生平均は2.0時間(同2.1時間)、3年生平均は2.7時間(同2.8時間)であった。本年度も家庭学習時間調査週間を年8回(3年生は年5回)設定した。調査結果を個別面談等に活用し、生徒が家庭学習にしっかり取り組めるよう指導した。	A	B	(評定)	生徒数は減少しているが、進学希望だけでなく就職希望も増えるなど、幅広い進路希望を持った生徒が入学してきていて、先生方の御苦労も多いことだろう。生徒の皆さんの努力だけでなく、先生方の御努力にも敬意を表したい。	生徒の学習状況を把握するためだけの資料で終わらない工夫をする。面談に資料を活用することで、生徒の生活習慣や学習習慣の改善を図り、家庭学習の時間を確保させる。また、学習面の悩みやつまづきの原因を探り、学習意欲を喚起する動機づけや手だてが講じられるようにする。
		2 予習・復習のための週末課題を提供し、自主的・計画的に学習させ、家庭学習の習慣化を図る。	生徒アンケート「週末課題が学習に役に立った」80%以上	生徒アンケートの肯定的評価は68%(前年度68%)であった。校内実力テストや校外模試の範囲に合わせた課題を提供した。	C	B		週末課題については、質と量を考えてその目的を明確にし、生徒の実態や希望進路に応じて提供する必要がある。	週末課題については、質と量を考えてその目的を明確にし、生徒の実態や希望進路に応じて提供する必要がある。
	② 基礎基本の徹底と学習意欲の喚起	1 各教科において確認テスト・小テストを行うとともに、授業理解を促進させるワークシート等を開発・提供する。	生徒アンケート「確認テスト・小テスト・ワークシートが役に立った」80%以上	生徒アンケートの肯定的評価は87%(前年度85%)であった。テストは合格点を決め、それに達するまで再テストを繰り返した。	A	B	(所見)	探究科の蚤に関する課題研究が、全国学芸サイエンスコンクール金賞を受賞したことは誠に素晴らしい。	教科書の内容に関連した新聞記事を提供する等の工夫により、生徒の興味・関心を高め、学習意欲を喚起する方策をさらに検討する。
		2 生徒の興味・関心を高める教材の開発とともに、探究的学習や課題解決的な学習活動の展開を図り、生徒の学習意欲喚起に繋げる。	生徒アンケート「進路実現に向けて学習意欲が高まった」80%以上	生徒アンケートの肯定的評価は81%(前年度77%)であった。授業公開週間や各種研究授業等の取組を通して、アクティブラーニングの研修や、電子黒板等情報機器を活用した授業開発に取り組んだ。	B				学習と部活動の両立をさらに支援するため、担任・部活動顧問を中心に教職員全体で生徒に対する共通理解を深める。
	③ 学習と部活動の両立への支援	1 部活動生徒理解懇談会を開催し、生徒の学習習慣や成績向上について教職員の共通理解を図る。	部活動生徒理解懇談会の開催回数 年1回	部活動生徒理解懇談会の開催回数は年1回(前年度年1回)であった。生徒指導課主催の生徒理解懇談会と重ねて実施した。	B	B	基礎基本の徹底や学習指導方法の改善が図られているが、週末課題の生徒評価が伸び悩んでいる。目的の明確化と、意識付けを徹底したい。各種検定試験の受験奨励は、目標に届きつつある。また、地域と連携した教育や図書館の有効活用が推進されている。しかし、家庭学習の習慣化については、今後も改善を続けていく必要がある。	学習と部活動の両立ができる方策を引き続き検討する。	
		2 定期考査前に部活動の練習時間短縮や勉強会を行い、学習時間を確保して学習習慣の定着を図る。	生徒・部活動顧問アンケート「定期考査前に(生徒の)学習時間が確保できた」80%以上	アンケートの肯定的評価は生徒75%(前年度71%)、部活動顧問90%(同84%)であった。定期考査1週間前から練習時間の短縮や勉強会を行った。	B			生徒の自主的な学習習慣を育成する方策、部活動との両立ができる方策を引き続き検討する。	
	④ 各種検定試験の受験奨励と対策	1 英語検定・漢字検定などの各種検定の受験を奨励するとともに、検定合格率の上昇を目指す。	英語検定・漢字検定などの各種検定の受験率 前年度比3%以上増	英検受験率は前年度比5.2%増で、漢検受験率は前年度比2.3%増であった。教科担任・ホームルーム担任などが生徒へ受験を働きかけ、英検は目標を達成したが、漢検は前年度の受検料値上げの影響が続いた。	B	B	できるだけ多くの生徒に受験を勧め、資格取得とともに学力向上の契機となるよう努める。	生徒がよりよい研究活動を行えるよう、地域の人材活用をさらに活発にし、より地域に根付いた課題研究を実施する。	
		2 漢字テストの予習・復習プリントを提供し、漢字テスト優秀者の割合を増加させる。	全10回の漢字テストのうち、合計90点以上の生徒の割合 20%以上	合計90点以上の生徒の割合は21.3%(前年度35.8%)であった。計画的に予習・復習プリントを提供して活用させた。	B			発表の形式を検討し、内容が分かりやすい成果発表会を実施する。	
	⑤ 教員の授業力向上と学習指導方法の改善	1 年2回の授業公開週間や研究授業の授業参観を通して、教員の授業力向上を図る。	教員アンケート「授業力向上に授業公開や研究授業を役立てることができた」80%以上	教員アンケートの肯定的評価は87%(前年度84%)であった。授業公開週間を前年度と同様に1・2学期に各1回2週間ずつ設定した。	A	A	学習指導方法の改善をさらに図るため、まず各教科・各学年で指導方法についての意見交換を増やすように引き続き努める。	発表の形式を検討し、内容が分かりやすい成果発表会を実施する。	
		2 各教科で教科会を定期的に開催するなどして、学習指導方法の改善について検討する。	教員アンケート「学習指導方法の改善を実践することができた」80%以上	教員アンケートの肯定的評価は95%(前年度92%)であった。定期考査・校内実力テスト前後を中心に、各教科・各学年で指導方法について意見交換を行った。	A			発表の形式を検討し、内容が分かりやすい成果発表会を実施する。	
	⑥ 地域と連携した教育の推進	1 地域の専門家を招き、地域をテーマとした課題研究を通して、地域の人材活用を図る。	地域を課題とした課題研究の実施テーマ数 5つ以上	実施テーマ数は年間10テーマ(前年度12テーマ)であった。本年度は地域の方々の協力を得て、全国学芸サイエンスコンクール金賞を受賞することができた。	A	A	生徒がよりよい研究活動を行えるよう、地域の人材活用をさらに活発にし、より地域に根付いた課題研究を実施する。	発表の形式を検討し、内容が分かりやすい成果発表会を実施する。	
		2 地域の方への課題研究成果発表会を行い、地域に開かれた学校づくりを推進する。	地域の方への課題研究成果発表会 年1回	地域の方への成果発表会は年1回(前年度年1回)であった。本年度も課題研究報告書を発行することができた。	B			発表の形式を検討し、内容が分かりやすい成果発表会を実施する。	
	⑦ 図書館の有効活用と読書活動の推進	1 図書館において定期的な図書展示を行って多様な資料への興味・関心を引き出し、図書館の有効活用を繋げる。	生徒一人あたり年間貸出冊数 4.5冊以上	生徒一人当たり年間貸出冊数は5.1冊(2月末時点)(前年度2月末4.1冊)であった。図書館における図書展示回数は年26回(2月末時点)(同2月末13回)であった。図書委員や教員による定期的なテーマ展示、おすすめ本展示、館内の催し物の成果物の展示に新たに取り組んだ。	A	A	図書委員と相談しながら、生徒の興味・関心を喚起する新たなコーナー作りに取り組む。	本年度テーマ展示に取り組んだ流れを活かし、ディスプレイ・広報など展示にまつわる活動に図書委員がさらに深く参加する機会を作るように努める。	
		2 『図書館だより』の作成に生徒が参加することで、図書委員や他の生徒の本への興味・関心を引き出し、読書活動の推進を図る。	生徒参加による『図書館だより』の発行回数 年10回	生徒参加による『図書館だより』の発行回数は年10回であった。図書委員会始動直後の4月と夏休みの8月を除く毎月発行できた。特定テーマの本を紹介する「特集」コーナーと、テーマを設けず本を紹介する「ブックリレー」コーナーを図書委員が担当した。	A			図書委員と相談しながら、生徒の興味・関心を喚起する新たなコーナー作りに取り組む。	

【備考】 「評価」及び「総合評価の評定」の基準 A：十分達成できた B：概ね達成できた C：達成できなかった